悪　霊　第九部・私刑の夜

【登場人物】

伊集院満枝……北海道H市の地主の娘。川奈産業の大株主
猪俣佐和子……党員。ハウスキーパー
飯島貫代美……元女工。モスクワ留学から帰国し党中央委員になる
佳代……貧しい農家の娘。安藤澄の女中
金沢文子……貧民窟に暮らす少女
韓愛子（ハンエジャ）……元玉ノ井の娼婦。日本での源氏名はまち子
李麗姫（イヨヒ）……元女性抗日パルチザン。満枝の協力者
小沼健吾……元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に
リヒャルト……ドイツの新聞記者。ソ連のスパイ。
安藤澄……東京帝国大学国史科助教授。安藤浄海の息子
朴正烈……朝鮮人青年
村野栄太郎……左翼の学者。党中央委員長
畑野達男……労働者出身の党中央委員
小泉俊吉……農民出身の党中央委員
清水……労働者出身の党中央委員
岩本……大学出身の党中央委員。文芸評論家
赤間……大学出身の党中央委員
大河原章雄……子爵の令息。
野島三郎……男爵の令息。
石川加奈子……銀座のビアホール女給。リヒャルトの愛人
花江……華族の令嬢
松子……華族の令嬢
朴美峰（パクミボン）……朴正烈の妹

【時・場所】

昭和八年（一九三三）七月～十一月。東京。

Ⅱ

九月になり、風が涼しくなる季節だった。麻布 笄町にある安藤澄の和風邸宅の中庭に面した縁側で、佳代は包丁を動かしながら栗の皮を剝いていた。薄暗い台所よりも、ぽかぽかと温かい縁側での作業を、佳代は好んだ。おまつという先輩の老女中は、ちかごろは体調を崩して来たり来なかったりなので、佳代が独りで家事をこなすことが多い。

新聞紙を広げ、剝いた皮を落とす。紙面では、前年五月十五日、犬養毅総理を暗殺した陸軍青年将校たちに禁固四年の判決がくだったことを伝えていた。全国から減刑嘆願の書面が七万通も集まったという解説記事も添えられている。首相暗殺は大罪ではあるが、彼らの憂国の情に同情する民衆がそれだけ多いということを、為政者は心せねばならないと結んである。

ふと佳代は包丁を持つ手をとめて、記事に添えられた写真を見つめた。犯行に加わった青年将校たちの顔写真が、切手大の大きさで並んでいる。

ここのところ、安藤邸をしきりと軍人らしい男たちが訪れるようになっていた。みな、角刈りで肩を怒らせ、記事のなかの青年たちと似通った雰囲気がある。八の字髭に羽織袴の壮士風の男が来るようにもなった。共産主義者たちの隠れ家でハウスキーパーをしていた頃に接していた人たちとは異質の、荒々しい気を醸し出す男たちだ。応接間から響いてくる豪傑を装った高笑いや怒鳴り声もまた、異質だった。

「ただいま」

玄関で声がした。出かけていた安藤澄が帰ってきたのだ。佳代は包丁を置いて立ち上がり、玄関に向かった。背広にカンカン帽をかぶった安藤が、玄関の板の間に大きな旅行鞄を放り出し、靴紐をほどいていた。

「おみやげだ」

佳代に背を向けたまま、鞄の脇に置いた小包を指さした。あけてみると、瓶詰めの奈良漬け、吉野葛の菓子折、三輪そうめん等が入っている。

「寝む。布団を敷いてくれ」

やはり背中を向けたまま命じられ、佳代は安藤の寝間に向かった。押し入れから布団をおろし、畳の上にのべていると、襖をがらりと開けて入ってきた安藤は、佳代を押し倒すようにして敷き布団に倒れ込んだ。佳代を組み敷いたまま、鼾をかきはじめた。

この夏、安藤は一ヶ月にわたって奈良の山奥にいた。吉野という地名を聞いたが、それがどこにあるのか佳代には見当もつかなかった。

佳代は、できるだけ起こさぬように気を遣いながら、安藤の体の下から這いだした。すでに肉体関係を結んではいたが、他の男たちと同様、佳代は何も感じなかったし、体をかわしたことで安藤への感情が変化したわけでもなかった。食事をつくったり洗濯するように、「主人」の求めに応えただけだった。

裾を払って寝間を出ようとすると、「あ！」と叫んで安藤が起きあがった。フィルムを現像に出してくれ。そう言って再び倒れ込み、そのまま寝入った。

玄関に向かうと、旅行鞄が放り出したままだった。開けると、汚れた下着やノートに混じって、

大量のフィルム缶の入った紙袋があった。安藤の家には、当時としては珍しく電話が備え付けられていた。駅前の写真館に電話をかけると、やがて主人が訪れ、フィルム缶を預かった。その夜、安藤は結局目を覚まさずじまいだった。佳代は、台所で冷え飯にお茶をかけて独りでかきこみ、就寝した。

翌朝目をさますと、午前五時にもかかわらず、安藤は起きて庭で竹刀を振っていた。それが毎朝の習わしだった。佳代を見ると、「出かける、風呂をわかしてくれ」と言った。風呂から出ると「車を呼んでくれ」と言う。朝食を終え、礼服にネクタイに着替え、タクシーが来ると、山高帽をかぶって、そそくさと出かけていった。

午後三時すぎに帰ってきた安藤は、それまでの疲れ切った雰囲気から打って変わって、上機嫌で饒舌だった。

「佳代」

茶の間で、佳代が淹れた茶を飲み干しながら、安藤は言った。

「今日、どこに言ったかわかるかい？」

佳代が首を傾げると、卓袱台の新聞を開いて、一枚の写真を指さした。陸軍大臣の顔が写っている。

「この人のお屋敷だよ」

禿頭に八の字髭、陸軍大将の肩章をつけ、数多くの勲章で飾った軍服姿の陸軍大臣の写真を見つめながら、とくに面差しを変えない佳代に、安藤は少し呆れたように言った。

「君は、つくづくみごとな女だ」

ぽかんと見つめてくる佳代を、安藤は畳の上に押し倒した。佳代は軽く目を瞬かせたが、すぐに落ち着いた面差しで安藤を見上げた。安藤は口を開いた。

「君は、処女ではなかった」

まばたきもせず、佳代の眼をのぞき込むように見つめて言った。

「君は、ハウスキーパーをしていたプロレタリア作家とも、寝たのか？」

佳代はしばし考え、やがて頷いた。安藤は重ねて問うた。

「君は、誰かを好きになったことはあるのか？」

そう問われ、佳代の脳裡にまっさきに浮かんだのは、小沼健吾の面差しだった。四年前に北海道H市で初めて出会って以来なにくれとなく気に掛けてくれた小沼は、ハウスキーパーを勤めた男性のなかで唯一、自分のからだに指一本触れなかった男でもあった。猪俣佐和子の隠れ家から、小沼とともに脱出しようとして警官隊に踏み込まれて以来、小沼がどこで何をしているのか佳代は知らない。知りたいと思ったこともなかったことに気づいて、佳代はまたも戸惑った。

確かに、自分は他人を好きになったことはない……。

じっと見下ろす安藤の眼差しに気づき、佳代は首を振った。安藤は静かに言った。

「君は、エゴイストであり、おそらくニヒリストだ」

そう言って安藤は佳代から離れ、あぐらをかいて煙草に火を付けた。

「プロレタリア作家であろうと、帝大助教授であろうと、陸軍大臣であろうと、君にとってはたぶん、生身の男性という以外の何者でもないのだろうね」

起きあがって身繕いしながら、佳代は独り喋る安藤を見つめた。……この人は、何を言って

るのだろう？
「君は、確乎として君自身というものを持っていて、それ以外の存在は他者でしかない。他者であると割り切っているからこそ、君は平等に他者と接して、区別というものをしない。自分がなすべきことをなし、他者から求められれば応える。理想的な近代的自我とは、案外、君のような心のありようかもしれないな」
首を傾げるばかりの佳代に見向きもせず、安藤は続けた。
「君は、興味ないかもしれないが、いまぼくは日本、いな、世界を揺るがしかねない事業に関与している」
六月だったかな。軍人が三人に、きれいな女性が三人、うちに来たことがあっただろう。そのとき、ぼくは重大な秘密を聞いた。奈良県の吉野に、それを持つ者は世界を支配すると言われる宝珠が隠されているというのだ。その在処を探るため、ぼくはこの夏、吉野の山奥に籠もり、秘蔵された古文書を写真に撮った。神代文字という、今は使われていない文字で記された膨大な文書だ。これを読み解けば、宝珠の在処はもとより、これから大日本帝国が歩むべき道を知ることができるという。六月に我が家に来た三人の女性のうち二人は、その文字を読むことができる。だが、なにせ二千年以上前の言葉だ。音は読めても、意味までは分からない。これからぼくは、この解読に全力を傾けるつもりだ……。
「と、大臣閣下には申し上げた」
熱弁を振るっていた安藤は、不意に苦笑して肩をすくめ、声を潜めた。
「閣下はおっしゃったよ。おおいにやりたまえ、帝国臣民を元気づけてやってほしい、とね」

こういうことだ。今から二十年前に始まった欧州大戦で、わが国は漁夫の利を得た。青島のドイツ軍をちょこっと攻めただけだったが、戦勝国の側についたおかげで、戦後、国際連盟の五大常任理事国の一国となった。みんな、日本は一等国になったと有頂天だった。戦場となった欧州の製品がアジアに入ってこなくなったので、日本製品が飛ぶように売れ、大勢の成金が生まれた。
だが、そんな歓びも束の間、大戦が終わると同時に不景気になり、さらに金融恐慌が追い打ちをかけた。支那の排日運動は日に日に激化し、欧米は日本より支那に同情的だと分かってきた。忠良なる帝国臣民は自信を喪失し、日本人としての誇りを取り戻せる何かを求めている。
「だからぼくは、神国日本だの、万邦無比なるわが国体だの、そんな題名の本を書いた。支那の悪口も書いた。中身はからっぽだが、帝大の博士様のお墨付きだ、馬鹿な連中はそんな本に飛びつき、おかげでぼくは大儲けだ。ましてや日本が世界を征服するとなれば、泣いて喜ぶ連中は大勢いる。ぼくは、自信を失った日本人の心の風邪を治療するお医者様なのさ」
ここに来てから三ヶ月、同じような台詞を何度聞かされただろう。そんなことを、別にうんざりするわけでもなく考えていると、
「君は、どう思う？」
向かい合って座った安藤が、額を突き出すようにして佳代の顔をのぞき込んだ。
「日本が世界を征服すれば、君は嬉しいか？」
佳代はぽかんと口を開けたまま、無言だった。安藤は笑った。
「そうだろうな。君のようなエゴイストにとって、日本が世界を征服しようが、一等国だろうが、どこかの国の植民地だろうが関わりなく、君は、ありのままの君であり続けるのだろうね」

呵々大笑する安藤に、佳代は面差しを毫も動かさず、ただ思った。
小沼さん、今どこで、どうしているのだろう……。

「ちょっと、小沼さん」
仰向けに河原に寝ころび、煙草をふかしていた小沼健吾に、七輪の上に置いた鍋をかき混ぜながら、金沢文子が声をかけた。
「よく煮えてるよ、食べない？」
「いいさ」
小沼は煙を吹き上げて言った。視線の先に、柔らかな日差しを注ぐ秋の太陽が燃えさかっている。市谷台下に広がる朝鮮人部落の昼餉時、朴正烈の小屋のある河原では、いつものようにどこから仕入れたか分からぬ肉や野菜を、唐辛子をぶちこんだ鍋で煮て、一椀三銭で振る舞われていた。
近頃の小沼は、朝鮮人部落に入り浸ったまま、無為の日々を過ごすことが多かった。伊集院満枝からは、迂闊に動かぬよう言われている。よほど信頼できて人望のある者以外、不用意に仲間を増やして事が露見してはならない、と。
すっかりものぐさになった小沼を、文子はそれ以上誘わず、「それでェ……」と周りに座って鍋をつつく女たちに向かって朝鮮語で喋りはじめた。「順調なの？」
「もちろんさ」
頷いたのは、皺だらけの粗末な韓服に身を包んだ李麗姫だった。片膝を立て椀のどぶろくをす

すりながら言った。その隣で、まち子こと韓愛子が、無言で骨付きの鶏肉にしゃぶりついている。
「日本の偉い人って、よほど馬鹿なのかな」
麗姫は、懐から名刺を数枚取り出して、文子に渡した。山本海軍大将、荒牧陸軍大将、徳川侯爵……。文子は一枚一枚めくりながら、軍や華族の大立て者たちの名前を読み上げた。
「ふうん、陸軍大臣までねえ」
「こいつら、満枝さんの舌先三寸ですっかり骨抜き、あんな与太話を信じちゃってる。それはいいんだけど、そいつらと会ってる間、あたしたちは南朝だか李朝だかの血をひくお姫様を演じなきゃいけない。これからもっともっと、お偉い人たちと会って、同じようなお芝居をしなきゃならないのよ。冗談じゃないわ」
「会ってる間だけじゃないわ」
愛子が顔をあげて静かに反論した。
「普段から、誰が見てるか分からないから、気が抜けないの」
「たしかに、そのとおりね」
頷いて麗姫は続けた。
「だから、ここに来たくなったわけよ。ここでは、朝鮮語でおしゃべりできるし、犬肉も食べられるから」
麗姫は、どぶろくを飲み干すと、河原に大の字になった。
「なんだか、満州の国境でパルチザンだった頃を思い出すわ」
「ほんと、お行儀の悪いお姫様だ」

文子はくすくす笑った。麗姫は口を尖らせた。
「仕方ないでしょ。今年の夏はずっと、あの頭のおかしな学者と一緒に過ごしたのよ。息が詰まるかと思ったわ」
「ああ、そうだったねえ」
文子は眼を輝かせて麗姫のそばにすり寄り、両膝を立てて座り、膝の上で両手を組んで顎を乗せた。
「二月もの間、吉野の山奥で一緒だったんだろ。どうだった？」
「なにも、ありゃしないわよ」
麗姫は顔を顰めた。
「あいつ、なぜか私たちには見向きもしやしない。そのくせ、村の娘に色目使ったり、尻を追いかけたり、みっともないったりゃ、ありゃしない」
「へーえ、あんたたちのような美人より、垢抜けない田舎娘のほうが好きなのかな」
「そうかもしれないわね。まあ、助かったわよ。あんな奴に色目使われたら、きんたま潰してやりたくて仕方なくなるもの」
「悪い癖だねえ」
文子は肩を竦めて笑った。
「一度、聞いてみたかったんだけどさ。伊集院満枝さんもそうだけど、あんたたちどうして、男のきんたまを潰すのが好きなの？」
「私は、男のきんたまを潰すのが好きなわけじゃないわ。日本人を、なるべく数多く去勢したい

だけ」
「じゃあ、あの人のも潰したいの？」
文子はくすくす笑いながら、河原に寝ころんで煙草をふかす小沼健吾を見やった。麗姫は真顔で答えた。
「あの人のきんたまを潰したら、文子さん、彼と情交できなくなるじゃないの」
文子と愛子は大声で笑った。朴正烈も苦笑した。朝鮮語を解しない小沼だけが、意味がわからず、互いの袖を引き合って哄笑する女たちを見やった。
「じゃあ、愛子は、なぜ男のきんたまを潰したがるの？」
「両親を日本人に殺されたからよ」
愛子は俯いて答えた。大震災の時だっけ？　そう小声で問う文子に小さく頷き、それから顔をあげて明るい笑顔を浮かべて言った。
「でも、それだけじゃない。私が好きだった男は、睾丸を潰されて死んだ」
「朝鮮の人？」
「ええ。とてもいい人だったけど、ある夜、死体で見つかった」
猪俣佐和子に去勢されて死んだ五郎のことだったが、それを知る由もない文子は面差しを引き締めて問うた。
「犯人は見つかったの？」
「見つからなかったわ。でも、そのことはいいの」
なんとなく、彼がどんな顔をして、どれだけ苦しんで死んだか、見たいという気持ちもあった。

でも、最近は違ってきたわ。
「どう違ってきたの？」
そう問う文子に、愛子は答えた。
「楽しくなってきたの」
「楽しい？」
「ええ」
愛子は微笑んで言った。
「男が藻掻き苦しみ、涙を流し、泣いて命乞いをする。それを見るのが楽しくなってきたのよ」
「いったい、なんの話ですか？」
日本語で発せられた男の声に、女たちが顔をあげると、小沼が立っていた。手でおなかをさすっている。さすがに空腹になったのだろう。
「知らぬが仏だよ」
文子がそう言い、女たちは笑った。朴正烈が、鍋の中身を椀に入れ小沼に手渡す。小沼は河原に腰をおろし、無言でかきこみはじめた。
「賑やかなのねえ」
みなが振り返ると、伊集院満枝が立っていた。無造作に後頭部で髪を縛り、ほっかむりにもんぺ姿、背に竹かごを背負い、近くの農村から行商に出てきたという風情である。
「あはは、新しい変装だね」
文子はそう言って吹き出し、女たちも笑った。

「これは、もんぺというの」
分厚い藍絣の生地をつまんでみせながら、満枝は言った。
「見栄えは悪いけれど、スカートより動きやすくていいわ。これからもちょくちょく、穿いてみようかしら」
「どうせ、きんたま蹴り上げるのに便利だからだろ」
からかうように言う文子に、満枝は真顔で頷き、女たちはまたも手を叩いて笑う。
「おひさしぶり、小沼さん」
満枝は、小沼の傍らに座った。ああ、と小沼は頷き、愛子や麗姫に目をやって言った。
「だいぶご活躍だそうだな。今や、あんたを知らぬ要人はいないんじゃないのか」
「あの二人のおかげですわ」
満枝は婉然とした面差しで言った。
「南朝と李朝の血を引く美しい姫君を、ひとめ見たいとお誘いがひっきりなしですの」
「やめてよ」
麗姫が、河原にあぐらをかいて鶏肉を手づかみで食べながら言った。
「さっきもその話をしていた。あの学者と二ヶ月、山奥でお姫様のふりをしていたせいか、肩が凝って仕方ない。だからここでこうやって、体をほぐしているんだが、二ヶ月ぶんの肩の凝りはなかなか取れない」
「お疲れ様だったわね」
満枝は頭をさげ、申し訳ないけど二人にはもっと肩が凝る仕事をしていただくことになったわ、

と付け加えた。
「なあに？」
背筋を伸ばし、真剣な面差しで問う愛子に、満枝は言った。
「来月、三人で赤坂に行くことになったの」
「赤坂？」
「そう、赤坂御所」
「御所だと？」
小沼の面差しが、さっと強張った。
「どの皇族に会うんだ？」
そう問うて息をつめて答えを待つ小沼に、満枝はさらりと言った。
「皇太后さまですわ」

赤坂御所とは、正式には赤坂御用地といい、うっそうとした森に覆われたなかに、天皇・皇后夫妻以外の皇族の住居（御所）が点在する地域である。もともとは紀州徳川家の領地だったが、明治維新後に皇室に献上された。警戒は厳しく、特に許された者以外、出入りは禁じられている。
「それにしても皇太后とは……」
皇太后とはすなわち、今上天皇の母親なのである。小沼は驚きを通り越して、あきれた面差しで声を低めた。例の「宮様」の紹介か？
「ええ、宮様の御所でお会いするの」

「要するに……」
文子が満枝に身を寄せ、手を伸ばして満枝のもんぺの股間をつかんだ。
「いよいよ天皇の懐に飛び込むわけだね」
身をびくりと震わせた満枝は、瞠った眼を文子を向けていたが、やがて破顔し、大きく頷いた。
「で、いつ潰してやるのさ」
文子は、長身の満枝の胸元に顎をくっつけるようにして、股間をさすった。満枝は、かすかに喘いで息を荒くしながら答えた。
「それは、もう少し時間がかかるわ」
麗姫と愛子を一瞥して、満枝は続けた。
「あの二人のお姫様しだいね」
そのとき、中年の朝鮮人女性が、河原にかけてきた。
「正烈！　朴正烈！」
鍋をかきまわしていた正烈が顔をあげると、中年女性は、河原に膝をつき、天を仰いで号泣しながら叫んだ。
「美峰が！……ああ、なんてこと、美峰が！」

河原を出ると、埃の舞い上がる土道に、ずらりと掘っ立て小屋が並んでいた。その一軒の入り口に人だかりができている。
血相を変えて走ってきた正烈が、その小屋に飛び込むと、白いチマを着けた少女が、茫然と天

井を見つめて仰向けに寝ていた。正烈の妹である朴美峰だった。その頬は赤く腫れがあり、チマの裾は赤く染まっている。彼女を囲む女たちはみな、身を捩って泣き叫んでいた。

「美峰！」

正烈は両手を握って天を仰ぎ、「なぜだ！　なぜだ！」と絶叫した。正烈、落ち着け！　小沼は正烈を抱き留め、満枝や文子を見やり、何があったか聞いてみてくれ、女だけのほうがいいだろう、と正烈を小屋から連れ出した。

美峰が重い口を開き始めたのは、夜になってからであった。日本に住む朝鮮人が従事する仕事のひとつに、人参商がある。朝鮮人参を材料として製造したと称する飴玉を売り歩くのだ。美峰は毎日、人参飴の入った箱を背負い、繁華街に出かけていき、深夜になるまで粘る。酔客のほうが、気前よく買ってくれたりするからだ。

その日の朝も、美峰は箱を背負って出かけていった。午前中は、繁華街では商売にならないので、住宅街を回る。麻布界隈を歩いていて、あるアパートの前で学生二人に呼び止められた。飴を買ってやるからと言われるままに彼らの部屋に入り、暴行されたのだった。学生は、美峰の飴を全部買ってやり、五円札を握らせ、これで十分だろうと外に突き出した。チマを真っ赤に染め、うつろな眼差しで足を引きずるように歩く美峰に目をとめる日本人は少なくなかったが、誰も助けてはくれなかった。美峰はなんとか部落まで帰り着き、気を失ったのだ。

「なんて、ひどい……」

文子は涙をこぼしながら呻くように言った。美峰は、彼女と同じ齢だった。

「そいつらも、わかってるのさ」

愛子がいまいましげに言った。

「朝鮮人が、日本人から手込めにされたと警察に訴えても、まず取り上げちゃくれない」

「じゃあ、このまま泣き寝入りかい？」

文子が叫んだ。

「冗談じゃないよ、このままただじゃすむものか。そいつらに目にもの見せてやらないと、とても気が収まらない！」

小屋にいたすべての女たちが、文子に同意し、口々に叫んだ。

「ねえ、麗姫」

女たちの叫びが一段落した頃合いに、ずっと黙っていた満枝が口を開いた。

「あなたが間島でパルチザンをやっていた時、日本兵が村の朝鮮娘を強姦した事件が起こったことはあった？」

「しょっちゅう、あったわ」

麗姫が答えると、満枝は重ねて問うた。

「そういう時、あなたたちは、どうしたの？」

「犯人を探し出した」

「探し出て、それから？」

「捕まえて連行し、睾丸を潰し、陰茎を切り取って口に詰めて窒息死させた」

二人の日本語での会話に、女たちの視線が向けられていた。麗姫は、そのやりとりを朝鮮語に直して、女たちに伝えた。女たちは息を呑んだ。

「皆さん、いかが？」
満枝は、麗姫に自分の言葉を朝鮮語に訳して伝えるよう頼んでから、言った。
「美峰さんをこんな目にあわせた男たちを、同じ目に合わせてやりたいと思わない？」
女たちは、互いに見つめ合った。ややあって一人の若い女が「賛成（チャンソン）！」と叫ぶと、女たちは、賛成、賛成と口々にわめきながら立ち上がった。
「わかったわ」
満枝は、頷きながら日本語で言った。
「麗姫、愛子。これから犯人を探し出すわよ。皇太后に会う前に、けりを着けましょう」
「なあ、満枝さん」
文子が満枝に寄ってきた。
「あんた、ひょっとして、あれをやるつもりかい？」
「あれ？」
文子は、ゆっくりと口にした。湖南省農民運動視察報告のことさ。
満枝は一瞬目を輝かせてかすかに笑い、すぐに面差しを引き締め、小屋を出た。外に小沼が押さえつけるようにして、正烈を座らせている。
「どうだった？」
顔をあげて問う小沼と、怒りに目を血走らせた正烈に、満枝は言った。
「わたくしたちに任せて。彼女が味わった以上の苦痛と恐怖を、犯人たちに味わわせてあげる。約束するわ」